

『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』に果たした ルードルフ・ボーデの貢献について

菅井 京子 (びわこ成蹊スポーツ大学)

Über den Beitrag Rudolf Bodes zur “Deutschen Gymnastik”

SUGAI Kyoko (Biwako Seikei Sport College)

Zusammenfassung

Anfang des 20. Jahrhunderts entstand in Europa mit Deutschland als Zentrum die sogenannte Gymnastikbewegung, in der man statt des in die Form gegossenen Spieß-Maul Systems und der stilisierten schwedischen Gymnastik eine neue Gymnastik erfand. Im Zentrum dieser Bewegung stehend, veranstaltete Franz Hilker (1881-1969) 1922 die “Tagung für künstlerische Körperschulung” in Berlin. 1923 publizierte er den Bericht der Tagung unter dem Titel “Die künstlerische Körperschulung”, 1925 gründete er den Deutschen Gymnastikbund, und 1926 veranstaltete er die Tagung “gymnastische Körperbildung” in Düsseldorf. Im selben Jahr publizierte er sein Werk “Reine Gymnastik”. 1931 veranstaltete er in München die Tagung “Gymnastik als Menschenbildung”. Durch diese Tätigkeiten schuf er eine starke Verbindung zwischen den vielen verschiedenen Gymnastikschulen. 1935 verfasste er sein Werk “Deutsche Gymnastik”, in dem er die Richtlinien der neuen Gymnastik festlegte. Auch in Japan wurden schon in den 30er Jahren in einigen Büchern die vielfältigen Tätigkeiten der gymnastischen Schulen vorgestellt. Aber in diesen Büchern gab es nur unbefriedigende Beschreibungen der im Rahmen der “Deutschen Gymnastik” verwirklichten Zusammenarbeit dieser Schulen.

Ziel der Arbeit ist es, zum Nachdenken über den Beitrag Rudolf Bodes zur “Deutschen Gymnastik” anzuregen. Dabei sollen neben der “Deutschen Gymnastik” u.a. “Körper und Kunst”, “Was uns not tut” und “Alte und neue Pädagogik” in “Künstlerische Körperschulung” und “Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik” in “Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl.” und “Gymnastische Körperbildung” und “Die Münchener Gymnastiktagung” in der Zeitschrift des Deutschen Gymnastikbundes “Gymnastik”, sowie “Spannung und Entspannung”, “Reine Gymnastik” und “Rudolf Bode - Leben und Werk” berücksichtigt werden.

R.Bode stellte “Schwung” ins Zentrum seiner Bewegungslehre und förderte die lebendige und rhythmische Bewegungsschulung. Er erkannte das Wesen vom Rhythmus im “rhythmischen Wechsel von Spannung und Entspannung” und in der “leiblich-seelischen Wechselwirkung” in der Bewegung. Von diesem Ausgangspunkt aus entwickelte er seine Gymnastik. Weiterhin strebte er nach der Körperschulung, die F.Hilker vorschlug. In der Körperschulung zielte man darauf, den Körper zum Träger nicht nur leiblicher, sondern auch seelischer und geistiger Werte zu machen. So führte R.Bode die verschiedenen Richtungen der Gymnastikbewegung zusammen. Im Arbeitsgebiet der Deutschen Gymnastik F.Hilkers, besonders in der “Grundschulung der Bewegung” leistete R.Bode einen großen Beitrag mit der Bewegung “Federn” und “Schwingen”.

はじめに

20世紀の初め頃、ヨーロッパではドイツを中心に体操改革運動が起こり、それまでのシュピース＝マウル方式の体操や形式化したスウェーデン体操に代わる新しい体操が求められた。この改革運動の流れのなかでL.パラート (Ludwig Pallat, 1867-1946)¹⁾とF.ヒルカー (Franz Hilker, 1881-1969)²⁾は、1922年にベルリンで「芸術的な身体修練のための会議」を開催し、1923年にその会議の報告書である『芸術的身体修練』³⁾を出版した。F.ヒルカーは、1925年に「ドイツ体操同盟」を設立し、その長として活動を始め、さらに1926年に『純粹体操』⁴⁾を出版した。ヒルカーは、これらの活動を通して新しい体操の諸派を強く結びつけていった。そして、彼は1935年に『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』⁵⁾を著し、新しい体操の拠り所となる指導要領を作り上げた⁶⁾。

新しい体操諸派の多彩な活動については、すでに我が国でも早い時期から紹介がなされている^{7), 8), 9), 10)}。しかし、この諸派がどのように関わって、『ドイツ体操』が作り上げられたのかということについての具体的な記述は少なく、不十分である¹¹⁾。

本研究では、前の論文で取り上げたルードルフ・フォン・ラバン (Rudolf von Laban, 1879-1958)¹²⁾に引き続き、ルードルフ・ボーデ (Rudolf Bode, 1881-1970。以後R.ボーデと略記)に焦点を当て、F.ヒルカーが推進した体操改革運動にR.ボーデがどのように関わったかを明らかにし、そのことによって、F.ヒルカーが『ドイツ体操』において提示した「体操の研究領域」の内容にR.ボーデがどのような貢献をしたのかについて考察する。用いる主な資料は、『ドイツ体操』の他、『芸術的身体修練』の初版から「身体と芸術」¹³⁾、「私たちに必要なこと」¹⁴⁾、「古い教育と新しい教育」¹⁵⁾、『芸術的身体修練』の改訂版から「表出体操¹⁶⁾の本質について」¹⁷⁾、そしてドイツ体操同盟の機関誌『体操』から「体操的身体陶冶」¹⁸⁾、「ミュンヘン体操会議」¹⁹⁾、さらに「緊張

と解緊」²⁰⁾、『純粹体操』、および「ルードルフ・ボーデ—その生涯と業績」²¹⁾等である。

I. 『ドイツ体操』の出版に至る経緯について

1. 体操改革運動と3つの体操会議

体操改革運動 (Gymnastikbewegung) は、20世紀の初め頃にドイツを中心にヨーロッパで起こった体操の改革運動の総称である。形骸化した体操に魂 (命) を吹き込むことが目指された。この運動は、当時の芸術的新潮流²²⁾に呼応するものであった。

グーツムーツ (J.C.GutsMuths, 1759-1839) やヤーン (F.L.Jahn, 1778-1852) がドイツ近代体育の先駆的役割を果たした後、学校への体育の導入は、ドイツ国内の体育論争を経て、19世紀中頃、シュピース (A.Spieß, 1810-1858) によって始められ、マウル (A.Maul, 1828-1907) によってほぼ達成されたといわれている²³⁾。近代体育としてのシュピース＝マウル方式の体操やスウェーデン体操は、初期にはそれぞれ独自の道を歩んだものの、19世紀後半にはヨーロッパ各国に普及し、世界各国に伝えられた。当時の自然科学万能の合理的精神に基づく体操は、幾何学的で形式的な集団運動形式の堅苦しいものが支配的であった²⁴⁾。その後、このような体操に対して、あまりに形式的、人為的であり、まるで鑄型にはめられた、あるいは操り人形のものであるという批判が高まり、新しい体操が求められた。そして、第一次世界大戦後になると、学校体育の改革運動が起こった。その急先鋒を担った運動のひとつが「自然体育 (Natürliches Turnen)」であった^{25), 26)}。そして、F.ヒルカー、R.v.ラバンやR.ボーデの主張もこの路線に立つものであった。

この体操改革運動の流れのなかで、新しい体操の諸派を集めて3つの大きな会議が開かれた。「芸術的な身体修練のための会議 (Tagung für künstlerische Körperschulung)」(1922年、ベルリン)、「体操的身体陶冶 (Gymnastische Körperbildung) の会議」(1926年、デュッセル

ルドルフ)、そして「人間形成としての体操 (Gymnastik als Menschenbildung) の会議」(1931年、ミュンヘン)である。

F.ヒルカーは、1931年の会議の報告である「ミュンヘン体操会議」²⁷⁾のなかで、この3つの会議はこれまでの体操改革運動を跡づけるもので、そこで掲げられたそれぞれのテーマ、「芸術的身体修練」、「体操的身体陶冶」、そして「人間形成としての体操」は、体操が改革運動のなかで歩んできた道、すなわち「身体運動の美的形成」から「いきいきとした身体現象の発現と育成」を経て、「総合的な人間形成」への道であったと述べている。

2. 芸術的な身体修練のための会議 (1922年、ベルリン)

1922年10月5日～7日、ベルリンにおいて「芸術的な身体修練のための会議」がB.メンゼンディーク (Bess Mensendieck, 1864-1957)、R.v.ラバンやR.ボーデ等を一堂に会して催された。この会議は、L.パラートが率いる「中央教育研究所 (Zentralinstitut für Erziehung und Unterricht, 1915-1945)」とF.ヒルカーが率いる「学校改革者決起同盟 (Bund entschiedener Schulreformer, 1919-1933)」が中心になって連絡して呼びかけることによって実現された。

当時まだ若い体育教師であったH.メダウ (Hinrich Medau, 1890-1974)²⁸⁾もこの会議に参加し、その著『新しい体操—メダウの教授法』のなかで、「毎日、1000人以上の観客、教育者、体操家、芸術家や体育・スポーツの代表者たちが演技発表について回った。」²⁹⁾と述べている。E.ハルテ (Erich Harte) も、この会議では次のような講演と演技発表が行われたと報告している³⁰⁾。講演者としては、R.フリース (Robert Fließ)、P.ベッカー (Paul Bekker) やF.キルヒベルク (Franz Kirchberg) 等々³¹⁾、そして、演技発表としてはダルクローズ (Freundtによる発表)、メンゼンディーク (Hedwig Hagemannによる発表)、R.v.ラバン (Rudolf von Laban自身による

発表)、ローエラント派 (v.Rohden-Langgaardによる発表)、R.ボーデ (Rudolf Bode自身による発表)、E.ダンカン (Merzによる発表) 等である。

この「芸術的な身体修練のための会議」の報告書として、1923年にL.パラートとF.ヒルカーの編集による『芸術的身体修練』が出版された。これには、編者たちによる序文の次に、まずパラートの「身体と芸術」、続いてヒルカーの「私たちに必要なこと」が掲載されており、それぞれの論文のなかで彼らの目指している芸術教育や体操の改革への立場が明らかにされている。この報告書には、R.ボーデも、「古い教育と新しい教育」を寄稿している。この『芸術的身体修練』は1924年に第2版、1926年に改訂第3版と版が重ねられた。この第3版は、いくつかの論文の差し換え等によって、会議の報告書以上のものになっていった。ヒルカーの「私たちに必要なこと」は、内容についてはほとんど同じであるが、題名が変更され「身体教育の新しい課題」となった。また、ボーデの論文は、「古い教育と新しい教育」から「表出体操の本質について」に差し換えられた。

1922年の会議当時、新しい体操諸派はまだばらばらに活動していたが、F.ヒルカーが1925年11月1日にドイツ体操同盟 (Deutscher Gymnastikbund, 1925-1933) を結成したことにより、これらの新しい体操諸派に共同研究の機会が与えられた。その結果、H.カルマイヤー (Hedwig Kallmeyer, 1884-1948)、E.ギンドラー (Elsa Gindler, 1885-1961)、B.メンゼンディーク、ローエラント派の人々、R.v.ラバン、そしてR.ボーデ等の諸派を強く結びつけることになった。ヒルカーは、1925年から1933年まで、この同盟の議長を務め、体操諸派をまとめていった。

3. 体操的身体陶冶の会議 (1926年、デュッセルドルフ)

このように体操諸派がようやくまとまり始め、共同研究も可能となった状況のなかで、1926年5月27日～29日、デュッセルドルフにおいて「体操

的身体陶冶の会議」が催された。この会議は、パラートが率いる「中央教育研究所」とヒルカーが率いる「ドイツ体操同盟」の共催で行われた。ドイツ体操同盟の報告³²⁾では、この会議には2000人以上の人々が参加し、パラートの「体操の身体陶冶」やヒルカーの「体操の文化的課題」等の講演の他、体操諸派の代表者たちによる講演や演技発表が行われた。講演に対応するデモンストレーションとして、ドイツメンゼンディーク体操、R.ボーデの表出体操、R.v.ラバンのハンブルク「動きの合唱団」、その他、ローエラント派、ギンドラー派、フォン・ホランダール(v.Hollander)派、ヘルマン(A.Herrmann)派、メンツラー(D.Menzler)派等の演技発表、さらに、M.ヴィグマン(M.Wigman)やK.ヨース(K.Joos,sic)のダンスの発表が行われた。

F.ヒルカーは、この1926年の会議の後、自身の実践的な体操の経験や研究、そして当時の指導的な体操諸派との友好関係を土台にして、この同じ年に『純粹体操』を公にした。彼は、会議の開催とその報告書の出版、著書の出版等の活動を通して、体操の本質や課題を明らかにすることによって、それまで長く続けられていたツルネンヤスポーツ団体との非難合戦³³⁾にも終止符をうった。さらに、その結果、明らかになった体操の本質や課題を手掛かりに体操教授法の指針を具体的に提示することによって、一致団結して新しい体操を普及させようとした。

4. 人間形成としての体操の会議 (1931年、ミュンヘン)

1931年2月27日～3月1日、ミュンヘンにおいて「人間形成としての体操 (Gymnastik als Menschenbildung) の会議」が催された。この会議は、ヒルカーが率いる「ドイツ体操同盟」の総会の時に一般公開の集会として行われた。ドイツ体操同盟の報告³⁴⁾によると、体操同盟の議長として、F.ヒルカーが「体操の教育的意義」について講演を行った。副議長としてE.ギンドラーの講演も行われた³⁵⁾。演技発表として

は、D.メンツラーとM.シュミツ (Margarete Schmidts) が「姿勢と動き」について、H.ゼンフ (Hilda Senff) が「リズム、音楽そして動き」について、ローエラント派が「方向の意味と空間体験」について、そしてH.メダウとギュンター派が「祝祭の夕べ」を行った。さらに、H.ハーゲマン (Hedwig Hagemann)、G.フィケンチャー (Gert Fikentscher)、D.メンツラーが「遊びと構成」について、カルマイヤー-ラウターバッハ派が「体操的課題への独自の取り組み」について発表を行った。

その後、F.ヒルカーは具体的な体操教授法を求めて努力を重ね、それをまとめようとした。そして、彼は1935年に彼の体操研究の集約である『ドイツ体操』を著した。

5. 『ドイツ体操』とその研究領域

『ドイツ体操』は、短い数行の前文の後、「ドイツ体操の特質について」、「ドイツ体操の研究領域」、そして「ドイツにおける体操の歴史」の3部で構成されている小冊子である。

『ドイツ体操』の主要部分である「ドイツ体操の研究領域」に提示された具体的内容は、「動きの基礎修練 (Grundschulung der Bewegung)」、「姿勢修練 (Haltungsschulung)」、「動きの展開 (Bewegungsentwicklung)」、「動きと手具 (Bewegung und Gerät)」、そして「動きの構成 (Bewegungsgestaltung)」の5つである。

(1) 動きの基礎修練

「動きの基礎修練」では、立位で行われる5つの基本運動が取り上げられている。日常的な運動から歩く、走る、跳ぶの3種、そして自由な運動としてはずむ、振るの2種である。これらの運動は、身体的特徴だけでなく心的また精神的にも考慮され、全身的に、すなわち、人間のホーリスティックな運動として扱われるべきであると強調されている。たとえば、歩く運動の特徴としては、身体的には安定や動的バランス、心的には閉静や瞑想、精神的には目標の明確さや威厳などが

挙げられている。しかし、具体的な動き方の指示はされておらず、それは実際の指導の場での教師の仕事であるとされている。

(2) 姿勢修練

「姿勢修練」は、動きの基礎修練を補完するものとして位置づけられ、骨格、筋肉、器官の発達不全やそれらの発達のバランスの崩れによる動きの不活発さ、抑制や欠陥を取り除くために行われる。

(3) 動きの展開

動きの基礎修練と注意深い姿勢修練を土台にして可能になる「動きの展開」では、基礎的な動き自体の変化・展開、組み合わせ、繋ぎ合わせ等が扱われる。基礎的な動きの変化・展開は、それぞれの動きがもつリズムの特性を高めたり、変化させることによって、また時間的、空間的に変化させることによって行われる。動きの組み合わせや繋ぎ合わせについては、はずみながら歩く、振りながら走る、走ってから跳ぶ等の他、抵抗のある動き、例えば押す、引く、突く、打つ等とも組み合わせ、繋ぎ合わせることができる。

(4) 動きと手具

手具を伴う動きは、動きの展開の一方法であると考えられる。『ドイツ体操』の動きの修練は立位での運動を主眼としているので、用いられる器具は固定した器械や可動式の大きな器械ではなく、ボール、棒、砲丸等、基礎的な動きの修練のために安定、はずみ、活気等を促し力動的な変化を与えられるような手具に限られている。

(5) 動きの構成

この「動きの構成」については、『ドイツ体操』ではほとんど説明がされていないが、暗示的に音楽、詩やダンスとの密接な関係が言及されている。ダンスとの関係について、ヒルカーは、「祝祭の時の仲間うちの運動によるコミュニケーションとしてのダンスは、ドイツ体操の課題のなかに含まれる。一方芸術ダンスはそれ独自の芸術的領域に入る。」³⁶⁾と述べている。動きの構成について、彼は体操と他の運動芸術領域との共通部分にひとつの大きな可能性を見出しているように

思われる。

II. 体操改革運動におけるR.ボーデの貢献について

この章では、R.ボーデの経歴を辿るなかで、彼が3つの体操会議にどのように関わり、新しい体操の諸派とともに体操改革に取り組んでいったかについてみていく。その際、F.ヒルカーが「ミュンヘン体操会議」³⁷⁾のなかでそれぞれの体操会議のテーマについて要約したキーワード、すなわち、「芸術的な身体修練—身体運動の美的形成」、「体操的身体陶冶—いきいきとした身体現象の発現と育成」、そして「人間形成としての体操—総合的な人間形成」をその道しるべとして用いることにする。そして、R.ボーデが、硬直した体操に命(魂)を吹き込んでいく経緯について明らかにするとともに、『ドイツ体操』にどのように貢献していったかを考察する。

1. 体操改革者としてのR.ボーデ

W.ボーデ (Wolfgang Bode, 1924-2004)³⁸⁾によると³⁹⁾、ルードルフ・ボーデは、1881年2月3日に、商人であるL.ボーデ (Ludwig Bode) とその妻エリーゼ (Elise) の息子としてキールに生まれた。1901年の夏学期に、彼はキール大学に入学し、哲学と自然科学の勉学に没頭した。この勉学は、ライプチヒ大学で1901-02年の冬学期に継続された。同時に音楽学校にも通った。1904年3月の作曲試験で、この音楽の勉強は終了した。1906年10月に、W.ヴント (Wilhelm Max Wundt, 1832-1920)⁴⁰⁾ とF.クリューガー (Felix Krüger, 1874-1948)⁴¹⁾ のもとで書いた論文「中および弱の強度の音叉の時間閾」により、博士の学位を受けた。その後、色々な劇場でオーケストラの指揮者としての歳月が続いた。

1909年4月に、彼はブラウンシュヴァイク (Braunschweig) でエリー (Elly Drenkmann, 1886-1983) と結婚した。この若い夫婦はスイスの音楽教育家であり作曲家でもあるジャック・ダルクローズ (E.Jaque-Dalcroze) のも

とて学ぶ決心をした。その研究所はドレスデン (Dresden) の近くの田園都市ヘレラウ (Hellerau) にあった。1911年10月、ボーデは、ミュンヘンでリズム体操の最初の教授を始め、ボーデ体操学校 (Bode Schule) を創立した。1913年4月に音楽堂で発表された最初のプログラムは、すでに入念に研究された新しい基本構想をもっていた。すなわち、「唯一の中心からの心的な作用による全身運動の有機的な⁴²⁾ 発現」⁴³⁾ という考えであった。1912年11月のルードヴィヒ・クラゲス (Ludwig Klages, 1872-1956)⁴⁴⁾ との出会い⁴⁵⁾ は、ボーデにその構想の妥当性を確信させ、振りの運動 (die schwingenden Bewegung) の明解な理論構築を促した。1913年に発表した論文『リズム体操の課題と目標』⁴⁶⁾ によって彼は彼の体操の基礎を固めた。1913年の夏、ボーデはヘレラウの夏期講習の聴覚教育の授業を受けもった。そこで、彼はダルクローズの代理としてボーデ式の体操授業を行った。ダルクローズ自身は出席していなかったが、その後、指導法をめぐってダルクローズとボーデの間に衝突⁴⁷⁾ が起こった。その結果、ボーデはダルクローズの方法論から離れ⁴⁸⁾、独自の道を進むこととなった。

1922年7月、彼の最初の基礎的研究である『表出体操』⁴⁹⁾ が出版された。この著書は、衝撃的に全ドイツにひろまり、ボーデの研究法を人々に知らせた。その後起こったボーデ運動は、1922年8月1日～15日イエナ (Jena) での大学講座より始まったと思われる。「その講座には、100人を超える教師が全ドイツから集まり、さらに多くの外国人、特にチェコスロバキア、スイス、スウェーデンからの参加があった。この参加者たちによって、身体教育のためのボーデ同盟 (Bode Bund für Körpererziehung)⁵⁰⁾ が設立された。その設立集会は、準備委員会の後8月11日の午後、小さな公民館で催された。議長はH.メダウ、書記はH.フルフト (Hans Frucht)、会計はM.フェルスト (Maria Först) が務めた。」と、H.フルフトはボーデ同盟「報告」第1号で述べている⁵¹⁾。イ

エナの大学講座に続く8月16日に、第二の講習会が160人の参加者を集めて彼の故郷であるキールで始められた。その後ボーデは最初の決定的な発展の糸口を得た。1922年10月5日～7日に開催された「芸術的身体修練のための会議」に、R.ボーデも参加したのである。この会議の後、ボーデはさらに多くの講習会に招聘されるようになった⁵²⁾。

2. 動きの修練

1922年の会議の頃は、まだ新しい体操諸派は全く別々に活動していた。シュピース＝マウル方式の体操やスウェーデン体操は、19世紀中頃からヨーロッパ各国に普及し、世界に広まった。それは、人間の身体運動を部分運動に分割し、それを組み合わせ、一連の運動に仕立てていく徒手体操や、整列・行進を中心とする秩序運動を内容とするもので、自然科学万能の合理的精神に基づき、号令に合わせて一斉に行われる幾何学的・形式的な集団運動であった⁵³⁾。しかし、その後、これらの体操は、あまりに機械的で人間の運動ではないという批判を受けるようになり、新しい体操が求められ、体操諸派による改革の努力がまず個別になされた。このような状況のなかで、1922年の最初の体操会議が行われた。

E.ハルテ (Erich Harte) の報告⁵⁴⁾ によると、1922年の「芸術的な身体修練のための会議」では、R.ボーデを含む新しい体操の諸派の演技発表が行われた。ハルテは、そのそれぞれの発表の具体的な運動について報告している。目的や方法は異なっていたが、この会議での演技発表では、歩く、走る、跳ぶ等の全身的な動きの基礎修練が特徴的であったことがわかる。H.メダウは、そこで発表された演技の印象を「部分運動の組み合わせではなく、全身が有機的に関わるような新しい運動学が、いろいろな演技を通して紹介された。」⁵⁵⁾ と述べている。そして、その会議に続く1926年の「体操の身体陶冶の会議」について、R.ハルテン (Reinhold Harten) は、「すべての自然な本物の動きは、全身、丸ごと人間を巻き込

んで行われ、リズムカルである。… (中略) …もし運動が本当に身体から湧きあがるならば、その全身運動はリズムカルであるに違いない。」⁵⁶⁾ という前置きをしたうえで、この会議での演技発表では身体を中心部を硬直させて行われる個々の筋肉や靭帯の部分運動ではなく、流れるような全身運動が目指されたと述べている。そして、発表された演技の特徴を表すキーワードとして「全体性 (Totalität)」と「リズム (Rhythmus)」を挙げている⁵⁷⁾。

このように、これらの会議での演技発表では、シュピース＝マウル方式の体操やスウェーデン体操の形式的な部分運動の組み合わせではなく、歩く、走る、跳ぶ等々のリズムカルで全身的な運動の基礎修練が取り上げられていたことがわかる。

F.ヒルカーは『純粹体操』のなかで「呼吸教育においても、筋肉群の鍛錬においても、姿勢や身体形成、緊張や解緊においても、内的あるいは外的な動きが重要であるので、体操においては身体に関するどのような研究もすべて動きの修練であるといつてよいであろう。」⁵⁸⁾ と述べ、「動きの修練」を新しい体操の中心課題に据えている。そして、自然でリズムカルな動きの修練は、すでにデルサルト (F.Delsarte, 1811-1871)、ステビンス (G.Stebbins) の時代から引き継がれ、E.ダンカン (E.Duncan, 1874-1948)、メンゼンディーク、カルマイヤー、ギンドラー、ローエラント派の人々、ボーデ等によって取り組まれてきたと説明している⁵⁹⁾。

3. R.ボーデによる「リズムカルな動きの修練」

R.ボーデは、『芸術的身体修練』の初版に寄せた論文「古い教育と新しい教育」のなかで、「今日の私たちの生活は常に強い意志的緊張を強いられている。それが引き起こす心の抑圧は私たちに大きな危機をもたらす。緊張は解緊によって解除される。緊張と解緊の対立はリズムそれ自体にその根拠がある (基礎づけられている)。解緊は身体に再び生命を養う力を与える。… (中略) …緊張と解緊の交替の上に構想されていないような

身体教育の体系は教育におけるこれまでの混迷をただ増大させるのみである。」⁶⁰⁾ と、「緊張と解緊」⁶¹⁾ そして「リズム」の問題を取り上げている。そして、彼は、『芸術的身体修練』の改訂版に載せた論文「表出体操の本質について」のなかで、「子どもたちの動きはリズムカルである。」⁶²⁾ と述べ、彼はそこから出発して新しい体操を展開してきたと説明している。「リズムという言葉に最も相応しいドイツ語は『振り (Schwung)』である。リズムカルな遊びをすることやリズムカルに踊ることを『揺れ動く (schwingend)』という。振りには、すべてのリズムカルなものもつ対になった要因が含まれる (持続性と分節である)。それゆえ、私たちは表出体操の中心に振りの運動 (Schwungübungen) をおいた。」⁶³⁾ と、彼はリズムの特性を「緊張と解緊の交替」にみとり、「振り (Schwung)」を中心にして彼の体操を作り上げていった。彼は、振りの運動として、下へ、上へ、横への振りと回旋、そして応用 (目的的运动) として打つ、引く運動、さらに (ゆっくりとした振りの応用として) 突く、押す、持ち上げる運動を挙げている⁶⁴⁾。

1922年の会議でのR.ボーデの演技発表について、E.ハルテは次のように具体的に報告している⁶⁵⁾。演技では、全身的な運動の経過にはリズムの繊細な波が現れるとして、解緊運動、身体を中心から始まる振動運動、さらに労働やスポーツや芸術活動のための基礎となるような緊張運動として突く、打つ、引く、つかむ、バランス、抵抗する等々の実演が行われた。

R.ボーデも、また、新しい体操の中心課題として、リズムカルな動きの修練に取り組んだのである。

4. 芸術的な身体修練—身体運動の美的形成

1922年の会議の報告書として出版された『芸術的身体修練』には、最初にL.パラートの「身体と芸術」が掲載されている。彼は、その最初の部分で、『芸術的身体修練』という書名の妥当性について検討している。身体修練の問題をただ体育の

領域のなかでのみ捉えるのではなく、当時進行中の芸術教育の改革運動とも照らし合わせるという視点をもつということが重要であるとの考えから、彼はこの名称にこだわりたいと述べている⁶⁶⁾。そして、芸術教育運動の当時の状況を次のように要約している。学校で「技術的科目」と呼ばれている図画、工作、綴り方、音楽そして体育は、本来、技術的なものとしてではなく芸術科目として学校へ導入されたが、19世紀という時代の流れのなかで科学性を追求し、ただ技術的な熟練や正確さを目指すような方法に重きがおかれ硬直化した。この硬直化に対して、これらの領域では改革運動が起り、技術的能力の取得をもはや決して主要な課題とみなさず、それまで最優先されてきた技術を内的な体験のための表出手段にする努力があらゆるところでなされたということであった。体育の改革をも含むこの改革運動では、当初から芸術教育が広義に捉えられ、内的な体験の表出が課題とされた。

F.ヒルカーは、「学校音楽と教会音楽のための研究所」で行われた講習会に参加した時に、音楽と運動を結びつけるダルクローズの新しい教授法の評判を耳にした。そして、ベルリン・フィルハーモニーホールで催されたダルクローズの講演を聞きに行き、少年少女たちがピアノに合わせてリズム的に系統立てられた動きをするのを見て感銘を受けた。しかし、彼はその時、その方法はまだ正しく行われていないと感じて、音楽のためだけでなく、もっと人間らしい総合的な動きの修練を課題とするような芸術的な体操に取り組むようになった⁶⁷⁾。

R.ボーデも、同じ理由から1913年に、ダルクローズの研究所を去った。そして、彼は子どものリズムカルな動きの観察から、全身運動や表出 (Ausdruck) に関する運動法則を導き出し、彼の運動学を確立していった⁶⁸⁾。彼は、「表出体操の本質について」のなかで、彼の体操について次のように述べている。「子どもたちの動きは表情豊かである (Ausdruck 表出をもつ)。このことから私は表出体操 (Ausdrucksgymnastik) と

という言葉に至る。この語は、そこに何かを描き出す (再現する darstellen) ということを意味するわけではない。そうであるならば、私は再現体操 (Darstellungsgymnastik) といっていたであろう。それは、また故意に表出させるのではなく、動きが全身を巻き込んだ時に、全くひとりでに現れ出るのである。動きは、実に表情豊か (ausdrucksvoll) である。人が望み、動きが適切に行われた時には、美しく、自然であり、有機的である。私たちは、身体教育において、体操において、ただ適切な動きをすればよい。そうすれば、それが男性的な力の展開を目指すものであれ、女性の身体教育の優雅さを目指すものであれ、豊かな表情を示す。」⁶⁹⁾そして、「新しい体操は、同時に表出体操でなければならない。」⁷⁰⁾と確言している。

このように、L.パラート、F.ヒルカー、そして R.ボーデは、「芸術的な身体修練」あるいは「身体運動の美的形成」のもとに、音楽や芸術のためのものという以上の総合的な身体修練、人間の動き自体のいきいきとして、美しく、リズムカルな形成を目指す「動きの修練」を考えていたことがわかる。

5. 体操的身体陶冶—いきいきとした身体現象の発現と育成

F.ヒルカーは、1923年の『芸術的身体修練』のなかに収められた「私たちに必要なこと」⁷¹⁾や1926年に雑誌に寄稿した「ツルネンと体操」⁷²⁾といった論文のなかで、体操について詳しく論じている。それらの論文のなかでヒルカーは、教育的な視点から当時の科学技術偏重の社会的傾向や、図画や体育においても技術や高い出来映えを求める成果主義に反対した。そして、知識や技術よりも内的な体験を重要視して教育する立場を貫いた。体操にとって技能は第二に求められるもので、体操においては身体的、心的、精神的にバランスのとれた運動体験が重視され、体操することそれ自体が目的とされる。そこに体操の本質があると、彼は主張した。そして、身体にいきいきと

した生命力を再び取り戻し、外的な目標設定やそれを達成するための身体の酷使によって生じる抑制から身体を解放しようとした。ヒルカーは、「人間を生命ある者として、より内的な法則性から作用するリズムカルな存在とみなすことが、まず一番に大事である。」⁷³⁾と述べている。

また、R.ボーデは、彼の体操の中心においた「振り (Schwung)」、すなわち「緊張と解緊のリズムカルな交替」において、心身の相互作用を指摘している。彼は、1925年に雑誌に投稿した論文「緊張と解緊」⁷⁴⁾のなかで、緊張と解緊は単に生理的な問題ではなく、心理的な問題でもあるとしている。例として、猫のジャンプの前の緊張とその後の解緊、クリスマスプレゼントを前にした子どもの緊張と包みを開けた後の解緊、実験の最終結果を見守る学生の緊張とその結果を見た後の解緊、登山者が日の出の瞬間を待つ時の緊張と朝日が昇った後の解緊等を挙げている。そして、彼は、全身運動における「身体と心の相互作用」を主張し、振りの運動や本来の表出運動は、身体の有機的な全体性から湧き出るものであると述べている。R.ボーデも、F.ヒルカーと同じように「心的・身体的リズムを維持し、生命がリズムで満ちるようにすることが身体教育の課題である。」⁷⁵⁾と述べている。

そして、F.ヒルカーは、1935年に完成させた『ドイツ体操』のなかでも、いきいきとした身体現象の発現と育成について、次のように言及している。「ひとりの人間のなかでリズムカルに踊るような生命の力、これは呼吸、循環、知覚、感情のなかにも現れるのであるが、そのような生命の力を感じ取る能力を呼び覚ますことを、新しいドイツ体操は動きの修練を通して目指してきた。」⁷⁶⁾

これらのことから、彼らの理想とする体操においては、いきいきとした身体現象が問題にされ、人間が本来もっている創造性豊かで湧き出るような生命力を活性化させることが求められていたことがわかる。

6. 人間形成としての体操—総合的な人間形成

L.バラートは、1926年の会議の報告である「体操的身体陶冶」のなかでも、1922年の会議の命名について長く熟慮したことを振り返っている。体操会議に先立って行われた芸術教育会議の成果を新しい体操の領域に反映するために、最初の体操会議の名称を「芸術的身体修練」としたと述べている⁷⁷⁾。彼が芸術教育会議の成果として挙げたことは、まず、硬直した方法の強制から子どもを解放すること、次に、教師たちの注意を創造力に向けさせ、その力を子どもの自然な発育発達に添った方法で維持し強化させること、そして最後に、最も高い目標でもある内的、外的な人間形成であった。その改革を通して芸術教育は全く干からびた学校の授業に新鮮な生を呼び覚ますことに成功したと、彼は述べ、この成功を青少年の身体教育でも実現しようとした⁷⁸⁾。新しい体操の諸派は、ともに、硬直した形態をほぐし、身体に自然を取り戻す、本来あるべき人間形成の新しい道を開こうとした。

F.ヒルカーは、「ミュンヘン体操会議」のなかで、「体操は、研究活動であるとともに、教育活動である。体操は、人間の自然を承認する。そこから生の課題や精神的な課題においていきいきとした力を形成する可能性を提供する。それゆえ、体操は、体育の問題というよりは、教育の問題である。」⁷⁹⁾と述べている。そして、彼は、『ドイツ体操』のなかでも、「(新しいドイツ体操は、)一面的な理性の優位性に対抗し、動きの修練において、身体的・心的・精神的に調和の取れたひとり人間としての存在の全体性を回復させようとしてきた。」⁸⁰⁾と述べ、体操が総合的な人間形成に関わる重要なものであることを主張した。

そして、R.ボーデも「古い教育と新しい教育」のなかで、「教育には主要科目も副科目もない！すべての科目は同等の価値がある。しかし、今日の学校における主要科目は系統立て、判断し、分析する等、精神 (Geist) の原理によって支配されている。心 (Seele) は、副科目においてでさえ灰かぶり姫を演じている状態である。」⁸¹⁾

と、理性中心の学校教育を批判している。彼は、「身体教育をして精神の教育と釣り合わせようとするのであれば、身体教育が知らず識らずのうちに精神的な訓育に陥ってしまうような危険を避けなければならない。」⁸²⁾と述べている。彼も、身体的、心的、そして精神的にバランスの取れた教育を構想していたことがわかる。

ドイツ体操同盟の規約のなかには、すでにこの総合的な人間形成の理想が次のように示されていた。「体操とは、身体をその建設的でいきいきとした力において発育、発達させ、そしてその身体を単に身体的だけでなく、心的、精神的な価値の担い手とするような身体修練である。」⁸³⁾と。

7. ドイツ体操の研究領域へのR.ボーデの貢献

3つの体操会議を含む体操改革運動を経て、『ドイツ体操』は完成された。そこに提示された「体操の研究領域」は、動きの基礎修練、姿勢修練、動きの展開、動きと手具、そして動きの構成の5つである。

「動きの基礎修練」では、5つの基本運動として歩く、走る、跳ぶ、はずむ、振るが取り上げられている。はずむと振る運動は、他の運動よりも上位におかれ、それぞれ単独でも、また歩く、走る、跳ぶ運動のなかでも行われる。「姿勢修練」は、動きの修練を補完するものとして位置づけられ、「動きの展開」では、基礎的な運動の変化やその他の運動との組み合わせ等が、「動きと手具」では、動きの展開の一方法として基礎的な動きの応用が扱われる。そしてそれらは構成へと進展していく。

この「動きの基礎修練—展開—構成」の流れのなかで、特に「動きの基礎修練」において、最も基礎的なものとされているのが、「はずむ (Federn) と振る (Schwingen)」である。F.ヒルカーは、次のように説明している。「はずむ」は、螺旋状あるいは板状のパネのように、外から強く押しつけられた後、元の形にもどるような動きで、「振る」は、横方向に突き当たることによって、反対方向へ振れる振り子のような動きで

ある。しかし、彼は、人間の動きの「はずむ」と「振る」は、身体の構造、生命、心的・精神的なものに根ざしており、機械的な意味で理解しないように気をつけねばならないとも付け加えている⁸⁴⁾。

R.ボーデは、「振り (Schwung)」に現れる「緊張と解緊の交替」にリズムの本質をみてとり、この「振り」を彼の体操の中心におき、緊張と解緊のリズミカルな交替、全身運動、身体と心の相互作用、そして表出に関する運動法則を駆使して動きの基礎修練に力を尽くした。

これまでみてきたように、ドイツ体操の「はずむ (Federn) と振る (Schwingen)」は、R.ボーデの体操の「振り (Schwung)」にあたる。つまり、F.ヒルカーは、ボーデのこの「振り (Schwung)」、すなわち「緊張と解緊のリズミカルな交替」を重要視し、ドイツ体操の「動きの基礎修練」のその基礎としての「はずむ (Federn) と振る (Schwingen)」に取り入れたと結論づけることができる。

おわりに

R.ボーデは、動きの修練の中心に「振り」を据え、彼の運動学を築き、リズミカルでいきいきとした動きの修練に取り組んだ。彼は、その「振り」に現れる「緊張と解緊の交替」や「身体と心の相互作用」にリズムの特性をみて、彼の体操を展開した。「表出体操」を掲げて独自の道を進むとともに、彼は、ドイツ体操同盟や体操会議に積極的に関わることによって、F.ヒルカーの提唱する「身体を単に身体的だけでなく、心的、精神的な価値の担い手とするような身体修練」を目指す体操改革運動に合流していった。F.ヒルカーは、『ドイツ体操』において「動きの基礎修練」から「動きの構成」に至る運動修練のための課程を「体操の領域」として示した。この「体操の領域」の特に「動きの基礎修練」に、その根幹をなすものとして「はずむ」と「振る」をおくことに、R.ボーデは大きな影響を与え貢献した。

F.ヒルカーとR.ボーデは、1922年の体操会議

以後おおよそ10年の歳月をともにして体操改革運動を推し進めてきた。ただし1931年の体操会議に、R.ボーデは参加していなかったようである。ドイツ体操同盟の機関誌『体操』には、1931年にボーデが同盟から脱会した⁸⁵⁾という記事⁸⁶⁾が載せられている。それは、ミュンヘン体操会議の少し前のボーデの誕生日のことであった。同盟の創設とその後最も有力な活動を展開した同志との別れに対し、F.ヒルカーは遺憾の念を、そして長年の共同研究と友情に感謝を表している。しかし、彼らの共通の活動はそこでは終わらなかった。ドイツ体操同盟はナチス(国家社会主義)の政府によって1933年に解散させられ、また他の多くの体育・スポーツの組織も解散させられて強制的にひとつの新しい団体、「ドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟(Reichsverband Deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V.)」に統合された。F.ヒルカーは、その連盟で自発的に体操部門の事務長として働いた⁸⁷⁾。そして、彼は1935年に彼の体操研究の集約である『ドイツ体操』を著した。R.ボーデも、この連盟の設立以来、「体操とダンス」の部門の指導を引き受け⁸⁸⁾、体操教授法の統一を図ろうと努力した。その努力の結果が、やはり1935年に、この連盟の叢書の第1号として出された『ドイツ体操』⁸⁹⁾である。この『ドイツ体操』は、ヒルカーの『ドイツ体操』とは別の小冊子である。しかし、この『ドイツ体操』にも、ヒルカーの体操の5つの研究領域(動きの基礎修練、姿勢修練、動きの展開、動きと手具、そして動きの構成)が、ほとんどそのまま踏襲されている。ドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟の編集によるこの『ドイツ体操』が出版されたことによって、当時のツルネン、スポーツそして体操の指導者の同僚たちに認められた、いわゆる体操の指導要領としての『ドイツ体操』ができあがった。こうして、F.ヒルカーとR.ボーデの2人の道が、また交わったのである。

注および引用・参考文献

- 1) L.パラートは、ベルリンの「中央教育研究所」の初代所長(1915年-1938年)を務めた。この研究所は、ワイマール共和国においてドイツの中心的な教育情報研究所に発展した。彼は枢密院上級参事官でもあった。ハレ・ヴィッテンベルク大学の総長(1928年-1932年)も務めた。F.ヒルカーとともに、芸術教育の全領域にわたる仕事を手がけた。パラートは上級の行政官としての役割を果たし、関連する法律や政令の所管を通して芸術教育に大きな影響を与えた。
- 2) F.ヒルカーは、1919年に「学校改革者決起同盟」を創設して、知識の詰め込み教育やそれによる生命疎外に反対する活動を行い、1920年代の早い時期からドイツの改革教育者の先駆的存在に位置づけられていた。1925年には、パラートの率いる「中央教育研究所」に招聘され、そこでヒルカーは芸術教育についての彼の考えをさらに深化、発展させた。そして、その事務総長(1930年-1933年)を務め、L.パラートとともに、芸術教育の全領域にわたる仕事を手がけた。ヒルカーは体操から文献学に至る教育の広い分野にわたって活躍し、特に体操については自ら実践的に取り組んだ。
- 3) Pallat, L. / Hilker, F., *Künstlerische Körperschulung*, Ferdinand Hirt :Breslau, 1923.
- 4) Hilker, F., *Reine Gymnastik*, Max Hesses Verlag: Berlin, 1926.
- 5) Hilker, F., *Deutsche Gymnastik*, Bibliographisches Institut: Leipzig, 1935.
- 6) 拙稿「ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について」、『スポーツ史研究』第24号、1-14頁、2010年。
- 7) 大谷武一、新教育体操、目黒書店：東京、1928年、45-83頁。
- 8) 大谷武一、新しい体操への道、目黒書店：東

- 京、1930年、3-130頁。
- 9) 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄、体育の本質と表現体操、目黒書店：東京、1933年、24-39頁。
- 10) 大谷武一、独逸其他に於ける新体操、宮辺富次郎編：『師範大学講座 体育 第六卷 海外に於ける主要なる体操』、建文館：東京、1936年、1-37頁。
- 11) 例えば、大谷、新しい体操への道、35-37頁には、「新体操諸流派の事業発展の状況を世間に紹介する目的を以て1926年デュッセルドルフで体操的身体陶冶会議が催された。会議では種々な諸流派の広範囲の方法形成と同時に、材料の点に於いて全く根本的接近がなされた。就中、ボーデの振動及び表現運動、ラバンの跳躍及び運動合奏、メンゼンディーク体系の形成運動は諸流派の信頼を得た。」という記述がみられるがごく僅かなものである。
- 12) 拙稿「ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik) に果たしたルードルフ・フォン・ラバンの貢献について」、『スポーツ史研究』第25号、1-15頁、2011年。
- 13) Pallat, L., Körper und Kunst, In: Künstlerische Körperschulung, Ferdinand Hirt: Breslau, 1923, S.5-8.
- 14) Hilker, F., Was uns not tut, In: Künstlerische Körperschulung, Ferdinand Hirt: Breslau, 1923, S.9-13.
- 15) Bode, R., Alte und neue Pädagogik, In: Künstlerische Körperschulung, Ferdinand Hirt: Breslau, 1923, S.138-143.
- 16) <Ausdrucksgymnastik>の訳語としては、大谷の「表現体操」(大谷、新しい体操への道、88-90頁) や、二宮の「表現体操」(二宮他、前掲書、書名および147-241頁) が有名である。表現と表出の違いについて調べてみると、広辞苑(新村出編、広辞苑第六版、岩波書店、2008年、2394-2395頁。)で、**【表現】**は「…総じて内面的・精神的・主体的なものを、外面的・感性的形象として表すこと。また…(中略)…(その) 形象そのもの、…(中略)…。表出。」とあり、一方**【表出】**は「①精神活動の動きが外部に表れること。表情・呼吸運動・筋肉運動・腺分泌の変化など。②表現に同じ。」とある。表現と表出は同じように用いられるという他に、微妙に、表現は「表す」、表出は「表われる」ということに重きがおかれているように読み取ることができる。また、横須賀は、**【新教育学大事典】**の「表現と教育」の項(細谷俊夫他編：新教育学大事典第6巻、第一法規出版、1990年、90頁。)のなかで、表出、表現、芸術の関係を次のように述べている。「笑ったり、泣いたり、身体をゆすったりという意識のコントロールを受けない活動に始まり、言葉を話したり、歌を歌ったり、絵を描いたりという表現活動が展開する。そして、そういう表現活動が一つの文化として成立するとき、芸術として総括し、その下に様々な活動ジャンルが生まれる。人間の表現活動を大ざっぱに整理すると、表出→表現→芸術ととらえることができる。」このことから、意識的、意図的な表現は、無意識で自然な表出を土台として展開されると考えられる。R.ボーデも、無意識に湧きあがり、自然に滲み出るような<Ausdruck>としての動きを問題にして、人間が本来もっているべき豊かできいきとした動きを課題とする<Ausdrucksgymnastik>を掲げている。それゆえ、本研究では<Ausdrucksgymnastik>の訳語は「表出体操」とするのがより厳密で適切であると考え、これを用いることにする。
- 17) Bode, R., Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, In: Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl., Ferdinand Hirt: Breslau, 1926, S.61-77.
- 18) Pallat, L., Gymnastische Körperbildung, Gymnastik, Jahrgang 1. Nr.5/6., S.65-69.

- 1926.
- 19) Hilker, F., Die Münchener Gymnastikta-
gung, Gymnastik, Jahrgang 6. Nr. 5/6.,
S. 65-68. 1931.
- 20) Bode, R., Spannung und Entspannung, Lei-
besübungen 12., S. 289-292., 1925.
- 21) Bode, W. (Hg.), Rudolf Bode - Leben und
Werk, Bode Bundes e.V.: München, 1972.
- 22) ドイツでは1870年代に文化批判の気運が高
まった。内容の空疎化した文明、物質主義、
産業主義やすべてを分析の対象とする主知主
義に対して人間の生産的諸力に基づく新しい
教養を求めた運動である。この運動の最も強
力な源泉が芸術であった。1880年代には、芸
術教育運動<Kunsterziehungsbewegung>
が起こった。20世紀初めに盛んになった改革
教育運動の一部とされている。産業化によっ
て疎外された人間を芸術、音楽、文学、体育
によって再び人間らしく教育することが目指
された。体操改革運動に先立ち、芸術教育会
議が開かれた。「芸術」をテーマに第1回芸術
教育会議が1901年にドレスデンで催された。
第2回は「文学」をテーマに1903年にヴァイ
マルで、そして第3回は「音楽と体操」を
テーマに1905年にハンブルクで開催された。
これらの会議では当初から芸術教育が広義に
捉えられ、生の形式の意義が深く洞察され、
議論された。
- 23) 中山厚生、ドイツ—体操科の成立と展開、成
田十次郎編：『スポーツと教育の歴史』、不味
堂出版：東京、1988年、47頁。
- 24) 岸野雄三・野々宮徹、現代体育の源流とス
ポーツの国際的動向、岸野雄三編著：『体育
史講義』、大修館書店：東京、1984年、108-
109頁。
- 25) 鑄型化したシュピースの体操や形式化したス
ウェーデン体操に対してガウルホーファー
(K. Gaulhofer, 1885-1941) とシュトライ
ヒャー (M. Streicher, 1891-1985) が取り組
んだ改革運動で、稲垣はこれを現代学校体育
の源流（「現代学校体育の源流：自然体育」、
岸野雄三他著：『体育・スポーツ人物思想
史』、不味堂出版、1979年、567-616頁）と位
置づけている。
- 26) Streicher, M., Natürliches Turnen Gesam-
melte Aufsätze III, V, Verlag für Jugend
und Volk, Gesellschaft m. b. H.: Wien, 1950.,
1959.
- 27) Hilker, F., Die Münchener Gymnastikta-
gung, S. 65.
- 28) ヒンリッヒ・メダウは、1890年5月13日に北
部ドイツのシュレスビヒ-ホルシュタイン
州に生まれた。音楽や民謡や民族舞踊や賛美
歌に興味をもち、彼は、音楽家になろうとし
た。しかし、彼の両親に反対され小学校教師
の養成課程に通った。終了後、彼は3年間リ
スボンのドイツ人学校で教鞭をとった。そこ
では公使館教会のオルガン奏者も勤めた。そ
の後マドリッドに移った。その当時、彼は、R.
ボーデの『リズムと身体教育』を読み、強く
感銘を受けた。そして、ミュンヘンのボーデ
のところで勉強するため帰国した。ボーデの
体操学校で学士号を取得した後、さらにミュ
ンヘン大学やベルリン大学で学んだ。ボーデ
のもとで、彼は、7年間、講習や講演そして
実演会を通して、運動教育の普及に努めた。
1925年のドイツ体操同盟の結成当初は、ボー
デ体操学校の代表としてその同盟の副議長を
務めた。1929年に、彼はボーデの学校から独
立し、体操女教師養成所をベルリンに設立し
た。
- 29) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der
Trenck, J., Moderne Gymnastik -Lehr-
weise Medau, Verlag Pohl-Druckerei und
Verlagsanstalt: Celle, 1967, S. 48.
- 30) Harte, E., Tagung für künstlerische Kör-
perschulung (5.-7. Oktober) in Berlin, Mo-
natsschrift für Turnen, Spiel und Sport, 2,
S. 410-416. 1922.
- 31) R. フリースは「いきいきとしていることに

- おけるリズム」、P.ベッカーは「芸術的身体修練のための音楽の重要性」、そしてF.キルヒベルクは「芸術的身体修練のための生理学の重要性」について講演している。
- 32) Deutscher Gymnastikbund e.V., Gymnastische Körperbildung, In:Tagung, Vorführung und Vorträge, Gymnastik, Jahrgang1. Nr.5/6., S.93-94. 1926.
- 33) 拙稿「ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik) に果たしたルードルフ・フォン・ラバンの貢献について」、4頁。
- 34) Deutscher Gymnastikbund e.V., 5.Hauptversammlung öffentliche Tagung des D.G.B. in München vom 27.Februar bis 1.Marz 1931.,In:Mitteilung des Deutschen Gymnastikbundes e.V., Gymnastik, Jahrgang6. Nr.1/2., S.61. 1931.
- 35) E.ギンドラーは「成人教育としての体操」について、その他、E.ヘングステンベルク (Elfriede Hengstenberg) が「子どもの体操的教育」についての講演をしている。
- 36) Hilker,F., Deutsche Gymnastik,S.28.
- 37) Hilker,F.,Die Münchener Gymnastiktagung, S.65.
- 38) W.ボーデは、R.ボーデとエリーの間生まれた3番目の子どもで、1982-2004年にはボーデ体操学校の経営管理者を務めた。
- 39) Bode,W., a.a.O.
- 40) W.ヴントは、ドイツの心理学者、哲学者である。実験心理学の建設者といわれる。最初医学を学び、ハイデルベルク大学の講師を経て、助教授となる。当時すでに心理学に関心をもち、感覚や知覚に関する論文がある。チューリヒ大学の哲学教授、ライプチヒ大学教授を歴任する。ライプチヒ大学で実験心理学を確立し、世界初の心理学実験室を設けた。この大学は心理学のメッカといわれた。
- 41) F.クリューガーは、ドイツの心理学者である。ライプチヒ大学、ハレ大学の教授を務めた後、ヴントの後任としてライプチヒ大学にもどる。彼は、ゲシュタルト派とは異なるが一種の全体性心理学の立場をとり、ドイツの色彩の濃い学説を形成した。
- 42) シュテーリヒ著、草薙他共訳、世界の思想史(下)、白水社：東京、1967年、236頁に、「彼ら(生の哲学に属する近代の思想家たち)は現実を『有機的なもの』とみなす。」という記述があり、「有機的」が当時の生の哲学のキーワードのひとつであったと考えられる。
- 43) Bode,W. a.a.O.S.9.
- 44) L.クラークスは、ドイツの哲学者、性格学者で、筆跡学者としても有名である。ニーチェを偉大な心理学者とみなし、その思想を伝えて「心」と「精神」との対立を説く。終始、民間学者として活動したが、主著『心の対抗者としての精神』が講壇哲学者の注意をひき、ドイツ哲学会議(1937年)の討論主題に選ばれた。精神(理性)をして心(生命)を危うくさせるものとみなし、ロゴス中心のヨーロッパ哲学に反旗を翻した。生の哲学の有力な代表者である。
- 45) Bode,U. (Hg.) , 100 Jahre Bode Schule 100 Jahre Gymnastik-Festschrift zum hundertjährigen Bestehen der Bode Schule 1911-2011,Trochos GmbH:München,2011.のS.9.によると、L.クラークスがミュンヘンで筆跡学の講習会を開催した際に、R.ボーデがその講習会に参加したのが彼らの最初の出会いであった。
- 46) Bode,R.,Aufgaben und Ziele der rhythmischen Gymnastik,Verlag der ärztlichen Rundschau Otto Gmelin: München, 1913.
- 47) 1913年に出版された『リズム体操の課題と目標』のなかで、R.ボーデは、ダルクローズのそれまでの功績を十分認めたいうえで、次のように彼の体操を批判している。「ダルクローズが彼の体操を『リズム体操』と名づけた…(中略)…ダルクローズによって考案された体操は、…(中略)…リズム体操

というよりメトリック体操といった方がよいのであるが、それは、心的な力を増大させるのではなく、すでにある心的な力とその表れである動きを意志と理性のために奉仕させる。… (中略) … (ダルクローズは) 音楽を動きに合わせるのではなく、動きを音楽に合わせる。… (中略) …たとえばバッハのフーガを身体で模倣するのである。あり得ないことである。… (中略) …これは間違った方法である。」(Bode,R., Aufgaben und Ziele der rhythmischen Gymnastik (1913), In: Aufgaben und Ziele der rhythmischen Gymnastik Fünf Abhandlungen, 3. erweiterte Aufl., C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung: München, 1933, S.8-10.) と、ボーデは述べ、リズムについての見解の違い、そして動きよりも音楽を優先させる方法論に対する不服を明らかにしている。

- 48) Preston-Dunlop,V.,Rudolf Laban/Biographical Entry in Dance Perspective's Ency. (manuscript), 1987.p.3.によると、この時期にS.ペロット (Suzanne Perrottet) やM.ヴィグマン (Marie Wiegmann sic) もダルクローズのもとを去っている。彼女らは、その後R.v.ラバンと活動をともにした。
- 49) Bode, R., Ausdrucksgymnastik, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung: München, 1922.
- 50) ボーデ同盟は、今日まで存続している。現在、R.ボーデの孫にあたるU.ボーデ (Ulrich Bode) が五代目の議長を務めている。
- 51) Bode,W. a.a.O.S.24.
- 52) 1923年5月1日～6月30日には、入門講座がベルリンのドイツ体育大学とシュパンダウ (Spandau) のプロイセン体育大学で同時に開講された。ボーデ同盟の報告、1923年第4号によると、その講座について、アルトロック (Altrock) は次のように報告している。「400人を超える人々がボーデの指導のもとで彼の新しい体操を練習した。観客も多

く、ボーデの表出体操を知る機会を得て彼らも少なからず感激した。ボーデは彼と彼の学校をさらに大きく発展させる可能性を生み出すような土台をここで得たといつてよいであろう。」と。

- 53) 稲垣正浩、新体操、岸野雄三編：『最新スポーツ大事典』、大修館書店：東京、1987年、449頁。
- 54) Harte,E.,Tagung für künstlerische Körperschulung (5.-7.Oktober) in Berlin, Monatsschrift für Turnen, Spiel und Sport, 2, S.410-416. 1922.
- 55) Medau,H., Medau,S.und Holler-von der Trenck, J.,Moderne Gymnastik -Lehrweise Medau, Verlag Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt:Celle, 1967, S.48.
- 56) Harten,R.,Gymnastische Körperbildung, Leibesübungen 21.,S.497-498., 1926.
- 57) ebd.,S.497-500.
- 58) Hilker,F.,Reine Gymnastik,S.93.
- 59) ebd.,S.94-108.
- 60) Bode,R.,Alte und neue Pädagogik,S.141.
- 61) 「緊張と解緊」は、<Spannung und Entspannung>の訳語として用いた。「解緊」については、一般的に辞書を調べてもない言葉である。例えば、新村出編、広辞苑第六版、岩波書店、2008年のなかでは見出せない。しかし、体操に関する先行研究を調べてみると、「解緊」が散見される。大谷の『新しい体操への道』(前掲)では、22頁に、メンゼンディークやカルマイエルの体操について、25-26頁にボーデの体操についての説明があり、そのなかで「解緊」が用いられている。41頁では、ボーデの体操のなかで、<Lockerung>を弛緩、<Entspannung>を解緊と翻訳したことが示されている。また、二宮他の『体育の本質と表現体操』(前掲)の111-121頁には、R.ボーデの論文 (Spannung und Entspannung,S.289-292.) の翻訳と思われるものがあり、そこでは題名だけ

が「(第八章) 緊張と弛緩」と訳されているが、なかの文章ではほとんど「解緊」の訳語が用いられている。R.ボーデはこの論文のなかで、「<Spannung, Entspannung und Entspannung>の度合いに関することは、身体教育の再編成にとって大変重要な問題である。」(S.289.)と述べているが、その際、<Entspannung>を自然科学的、生理学的弛緩とし、<Spannung und Entspannung>を対の語として用いている。そして、「すべての生命現象は、分かれた極と極の自己統一である。」(S.293.)と述べている。本論では、<Spannung und Entspannung>を全く別の2つのものとしてではなく、一続きのもの両端と捉えたいという思いから、「緊」という文字を共通にした「緊張と解緊」の訳語を用いた。

- 62) Bode,R., Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.66-67.
- 63) ebd., S.74-75.
- 64) ebd., S.75.
- 65) Harte,E., a.a.O. S.413.-414.
- 66) Pallat, L., Körper und Kunst, S.5.
- 67) Radde,G., Aus dem Leben und Wirken des entschiedenen Schulreformers Franz Hilker (1881-1969), In: Peter Drewek (Hrsg.): Ambivalenzen der Pädagogik. Zur Bildungsgeschichte der Aufklärung und des 20. Jahrhunderts. Harald Scholtz zum 65. Geburtstag, Deutscher Studienverlag: Weinheim, 1995, S.145-167.
- 68) Bode,R., Vom Wesen der Ausdrucksgymnastik, S.70-71.
- 69) ebd., S.71.
- 70) ebd., S.74.
- 71) Hilker,F., Was uns not tut, S.9-13.
- 72) Hilker,F., Turnen und Gymnastik, Leibesübungen 21., S.489-490., 1926.
- 73) Hilker,F., Was uns not tut, S.13.
- 74) Bode,R., Spannung und Entspannung, S.289-292.
- 75) Bode,R., Alte und neue Pädagogik, S.140.
- 76) Hilker,F., Deutsche Gymnastik, S.12.
- 77) Pallat, L., Gymnastische Körperbildung, S.65.
- 78) ebd.
- 79) Hilker,F., Die Münchener Gymnastiktagung, S.65.
- 80) Hilker,F., Deutsche Gymnastik, S.12.
- 81) Bode,R., Alte und neue Pädagogik, S.139.
- 82) ebd., S.140.
- 83) Deutscher Gymnastikbund e.V., Satzung, Gymnastik, Jahrgang 1. Nr.1/2. S.22. 1926.
- 84) Hilker,F., Deutsche Gymnastik, S.21.
- 85) Bode,U., a.a.O.S.14.u.17.によると、これはR.ボーデとF.ヒルカーの間に問題があったのではなく、R.ボーデとH.メダウとの間に生じた確執が原因であったことがわかる。
- 86) Deutscher Gymnastikbund e.V., Glückwunsch und Abschied., In: Mitteilung des Deutschen Gymnastikbundes e.V., Gymnastik, Jahrgang 6. Nr.1/2., S.61-62. 1931.
- 87) Radde,G., a.a.O.S.163.
- 88) Bode,W. a.a.O.S.24-25.
- 89) Der Reichesverband deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V., Deutsche Gymnastik, Wilhelm Limpert Verlag: Berlin, 1935.